

第5回男女共同参画シンポジウム報告

男女共同参画推進委員会

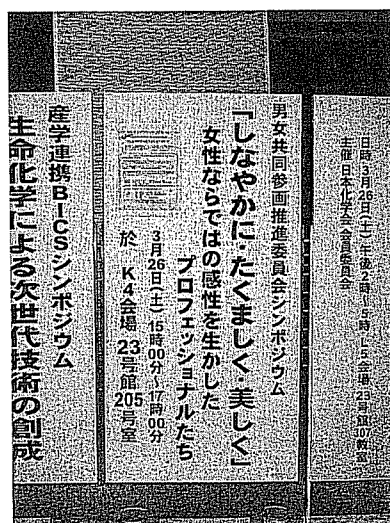
豊饒なる男女共同参画

“しなやかに・たくましく・美しく

～女性ならではの感性を生かしたプロフェッショナルたち～”

今年3月26日、15時～17時の間に神奈川大学横浜キャンパス23号館205号室において、同委員会シンポジウムワーキンググループによる第5回男女共同参画シンポジウムが、第85春季年会に合わせて開催されました。外資系企業でバイオテクノロジー問題アジア・太平洋地域マネージャーを務める笠井美恵子氏、現在、精力的に作品を発表するアーティストの祐成勝枝氏、そして、日常のわたしたちと進歩する科学をうまくつなぐ生命誌というテーマを追いかける中村桂子氏にお越しいただき、各氏の過去～現在～未来についてMy Lifeを語っていただきました。そこには、時代と人との出会い、そしてわたしとは何？ という問題への関心に、女性の感性が加わって織り成す人生という作品を垣間見たような気がします。

最初の講演者は、笠井美恵子氏です。氏は、小学校時代に、かまきりの卵を見て生命の神秘を感じ、キュリー夫人の伝記に触れ、学校の実験での炎色反応に魅せられ、理科教師になろうと教育学部へ進み、教育実習の現場で教師としての自信を失い、断念しますが、その後のオーストラリアへの留学が、再び科学への道を進ませることになるのです。しかし、当時の男女差で、日本の企業に就職できず、外国企業へ就職します。その後、結婚をし、退社し、米国の大学院へ、そして現在の会社へ就職します。そこで、氏は、「人生はやり直せる」、「人との出会いからいろいろな機会が訪れる」ことを思ったそうです。氏は、バイオテクノロジー利用品種の安全性のデータの収集と公表について、消



費者の選択の自由 (informed choice) を目指し、悪戦苦闘の毎日であり、人口の増加、それに必要な食料を生産する農業、さらに、環境にやさしい持続可能な農業を考えています。農業使用を軽減したいし、農業の高齢化も問題です。このための技術として、遺伝子組み換えの貢献はとても大きいものだそうです。しかし、消費者側にはとても悪いイメージがあります。そこで遺伝子組み換えの現場での効果を消費者に知らせる必要があるわけです。このような情報提供は確かに消費者の理解へつながるのです。氏に長く多国籍企業に勤めていて思うことを話していただきました。そこでは、人間関係を作る異文化間コミュニケーションはとても大切です。いろいろなコンセプトの強い単語が使われます。developing relationship, 心を開いて信頼関係を構築することで、アジアではよく理解されます。networking, よい表現ではありませんが、利害の一致として、欧米では大切にされる関係です。使い分けることはとても重要なわけです。氏の元気の源は、作家林真理子さんの「運気は貯金できる」を実践し、たくさんの元気な女性の友だちを持つことだそうです。

二番目の講演は、祐成（すけなり）勝枝氏のお話です。氏は、大学卒業後、宝石の仕入れと加工をする会社に入社します。当時、施行された男女雇用均等法のおかげで、一つの会社を任されることになり、仕事は宝石の企画と販売で、大成功し、そのご褒美にシンガポール旅行がプレゼントされ、当地の美術作品に出会い、再び創作活動を開始します。結婚とともに退社し、等身大の人形製作を行います。「わたしとはなんぞや？をビジュアルに表現したい」が氏の目的だそうです。その後、年少時代過ごした北九州の日本で最初の鉄筋アパートを訪れ、かつて妹と二人で留守番中、火事に遭遇したことを鮮明に思い出します。アパートの名前は桃園。氏は、この桃園のイメージを版画として表現することになります。このイメージが今なお氏の創作活動の源泉であるそうです。その後、夫の都合で、オーストリア、ミュンヘンへ。現地で“桃園”の創作活動を続け、そして帰国後も。その原動力“桃園”は「外にはみ出したい力」だそうです。この頃から作品依頼はぞくぞくと来ることになります。インテリアショップからポスターのアートの依頼。川崎のIBMギャラリー。三菱化学研究所。ここで日本化学会員だった小野田氏と出会います。岡山の病院内の壁のアート。コクヨのノート。札幌 JR タワーのトイレに続く通路の壁。もともと何もない壁に描いたアートには人が集まります。将来の目標は“携帯電話”のようなアートで、ディスプレイの小さな窓と世界がアンテナを通して情報行き来する、そのような創作活動となることを夢んでいるそうです。

最後の講演者は、生化学、生命科学、生命誌の開拓者の中村桂子氏です。氏がいつも大切にしていることは仕事に日常をつなぐことだと言います。それが生命誌なのだ。この自分がやりたかった生命誌がなぜできたのか？ それは時代との出会いとご自身の性格であると説明してくださいました。氏ご自身による性格

分析では、競争心がない、流行は苦手、本質的なことが好きなのだそうです。大学で化学を専攻したのは、とても素敵な女性の化学の高校の先生との出会いであり、その先生が後日、氏に伝えたことは、どうやって化学が生まれてきたか、わたしたちは化学をどうやって使っていったらよいのだろうか、ということでした。大学時代、化学は社会の花形で、石油と原子力に社会の期待がありました。しかし、氏はそれらのことには関心を持たず、化学と生活の關係にとっても興味を持ちました。当時、二つのことに出会います。体内代謝とDNA。体の中の研究はマイノリティーな分野。これをやろうと決めたとき、友人からは「なぜ化学をやめて、生物なのか」と言われたそうです。しかし、氏はただ、「これは綺麗だ！」という自身の気持ちに従いました。マイノリティーは、それがゆえに楽しい。例えば、指導者の渡辺格先生も勉強中だから、一緒に勉強できた。博士課程の指導者として出会った江上不二夫先生は、1970年代に、生命科学、ライフサイエンスとう学問分野を創設されました。しかし、素敵な先生との出会いは確かにありましたが、依然として化学と社会や日常が繋がらない現状に納得がいかなかったそうです。これを一致させて仕事をするのはどうしたらよいか、悩みましたが、ある日突然「生命誌科学研究館」を思い浮かび、悩みが一瞬に解けることになります。何でも遺伝子に還元して考えるのが常ですが、それは違う。ゲノムであると。生命は、38億年の歴史を持ち、そこには多様性と共通性があります。この考えは日常的なものと合致します。この考えが生命誌なのです。今、サイエンスは曲がり角にいます。還元型思考ではない新しい科学が必要で、それには女性の感性が必要なのではと氏は言います。学問と日常をつなぐことをやってほしい。これが、現在の氏の悩みであり、また、願いなのです。

〔文責：森 義仁（お茶大理）〕